

公益財団法人図書館振興財団

第18回 子どもの本 この1年を振り返って 2017年 ブックリスト

■フィクションの部■

公益財団法人図書館振興財団 児童図書館研究会

小野寺 千秋

◆紹介したいと思える本の少なかった1年

特に、低学年から中学年向きの作品の少なさは危機的
高学年からYA向けの作品で力のある作品が目立った

◆さまざまな状況に生きる子どもたち

生きることに困難を抱える子どもたちの気持ちを丁寧に描いた作品
サポートしてくれる周囲の大人や友人の存在
世界のいろいろな場所に生きる子どもを描いた物語にも注目

◆戦争

力のあるノンフィクション
日本の作品では、これまでとは違った切り口のものが出てきた

◆幼年文学

大日本図書「こころのほんばこ」
こぐま社「こぐまのどんどんぶんこ」

◆学校・友達・家族

リアリティのある親しみやすい日本の作品
介護などの問題を取り入れたものも
転校生

◆昔の日本を舞台に

ここ数年続いている傾向だが、今年は読みやすいものが多かった

◆神話・昔話・詩

ベテランのお話の書き手による思い入れの感じられる作品

■さまざまな状況に生きる子どもたち

★	小高	『ぼくとベルさん 友だちは発明王』(わたしたちの本棚)/フィリップ・ロイ・著, 榎田 理絵・訳/PHP研究所/2017. 2/¥1400/(933. 7)
★	小高	『木の中の魚』(講談社文学の扉)/リンダ・マラー・ハント・著, 中井 はるの・訳/講談社/2017. 11/¥1400/(933. 7)
★	小高・YA	『ぼくはO・C・ダニエル』(鈴木出版の児童文学)/ウェスリー・キング・作, 大西 味・訳/鈴木出版/2017. 10/¥1600/(933. 7)
	小高・YA	『わたしがいどんだ戦い1939年』/キンバリー・ブルベイカー・ブラッドリー・作, 大作 道子・訳/評論社/2017. 8/¥1600/(933. 7)
	小高・YA	『ジュビリー』/パトリシア・ライリー・ギフ・作, もりうち すみこ・訳/さ・え・ら書房/2017. 10/¥1500/(933. 7)
	YA	『パンツ・プロジェクト』/キャット・クラーク・著, 三辺 律子・訳/あすなろ書房/2017. 10/¥1400/(933. 7)
★	小高	『タイガー・ボーイ』(鈴木出版の児童文学)/ミタリ・パーキンス・作, 永瀬 比奈・訳/鈴木出版/2017. 6/¥1500/(933. 7)
★	小高	『わたしも水着をきてみたい』/オーサ・ストルク・作, ヒッテ・スペー・絵, きただい えりこ・訳/さ・え・ら書房/2017. 10/¥1200/(949. 83)

■戦争

	小高	『ファニー13歳の指揮官』/ファニー・ベン＝アミ・著, 伏見 操・訳/岩波書店/2017. 8/¥1500/(929. 736)
★	YA	『いのちは贈りもの ホロコーストを生きのびて』(海外文学コレクション)/フランシーヌ・クリストフ・著, 河野 万里子・訳/岩崎書店/2017. 7/¥1600/(956)
	小中	『図書館にいたユニコーン』/マイケル・モーパーゴ・作, おびか ゆうこ・訳/徳間書店/2017. 11/¥1300/(933. 7)
★	小高	『お母さんの生まれた国』/茂木 ちあき・作/新日本出版社/2017. 12/¥1500/(913. 6)
	小高	『見上げた空は青かった』/小手鞠 るい・著/講談社/2017. 7/¥1300/(913. 6)
	小高	『花あかりともして』/服部 千春・作/出版ワークス/2017. 7/¥1400/(913. 6)

■幼年文学

★	小低	『たんけんクラブ シークレット・スリー』(こころのほんばこシリーズ)/ミルドレッド・マイリック・ぶん, 小宮 由・やく/大日本図書/2017. 3/¥1400/(933. 7)
	小低	『おしろのぼん人とガレスピー』(こころのほんばこシリーズ)/ベンジャミン・エルキン・ぶん, 小宮 由・やく/大日本図書/2017. 1/¥1400/(933. 7)
	小低	『サンタクロースのはるやすみ』(こころのほんばこシリーズ)/ロジャー・デュボアザン・ぶん・え, 小宮 由・やく/大日本図書/2017. 2/¥1400/(933. 7)
★	小低	『小さな赤いめんどり』(こぐまのどんどんぶんこ)/アリソン・アトリー・作, 神宮 輝夫・訳/こぐま社/2017. 3(大日本図書 1969年刊の訳に若干の修正を行い、挿絵はすべて新しくしたもの)/¥1200/(933. 7)

	小低	『ちびおにビッキ』(こぐまのどんどんぶんこ)/砂山 恵美子・作・絵/こぐま社/2017. 3/¥1200/(913. 6)
	小低	『てんこうせいはワニだった!』(こぐまのどんどんぶんこ)/おの りえん・作・絵/こぐま社/2017. 10/¥1200/(913. 6)
★	小低	『とうふやのかんこちゃん』(福音館創作童話シリーズ)/吉田 道子・文/福音館書店/2017. 10/¥1300/(913. 6)
★	小低	『ツトムとネコのひのようじん』(おはなしだいすき)/にしかわ おさむ・ぶん・え/小峰書店/2017. 11/¥1200/(913. 6)
★	小低	『メリーメリーおとまりにでかける』/ジョン・G. ロビンソン・作・絵, 小宮 由・訳/岩波書店/2017. 3/¥1300/(933. 7)
	小低	『メリーメリーのびっくりプレゼント』/ジョン・G. ロビンソン・作・絵, 小宮 由・訳/岩波書店/2017. 6/¥1300/(933. 7)
	小低	『メリーメリーへんしんする』/ジョン・G. ロビンソン・作・絵, 小宮 由・訳/岩波書店/2017. 9/¥1300/(933. 7)
	小低	『きみ、なにがすき?』/はせがわ さとみ・作/あかね書房/2017. 10/¥1200/(913. 6)

■学校・友達

★	小低	『ともだちのときちゃん』(おはなしのまど)/岩瀬 成子・作/フレーベル館/2017. 9/¥1100/(913. 6)
★	小中	『レイナが島にやってきた!』/長崎 夏海・作/理論社/2017. 10/¥1400/(913. 6)
	小中	『小学校がなくなる!』(文研ブックランド)/麻生 かつこ・作/文研出版/2017. 6/¥1200/(913. 6)
★	小中・小高	『ぼくらの山の学校』(わたしたちの本棚)/八束 澄子・著/PHP研究所/2018. 1/¥1400/(913. 6)
★	小高	『あした飛ぶ』(ティーンズ文学館)/東田 澄江・作/学研プラス/2017. 11/¥1400/(913. 6)
★	小高	『ソーリ!』(くもんの児童文学)/濱野 京子・作/くもん出版/2017. 11/¥1300/(913. 6)
★	小高	『香菜とななつの秘密』/福田 隆浩・著/講談社/2017. 4/¥1300/(913. 6)
	小高	『青がやってきた』(偕成社ノベルフリーク)/まはら 三桃・作/偕成社/2017. 10/¥900/(913. 6)
	小高	『あぐり☆サイエンスクラブ:春 まさかの田んぼクラブ! ?』/堀米 薫・作/新日本出版社/2017. 4/¥1400/(913. 6)
	小高	『あぐり☆サイエンスクラブ:夏 夏合宿が待っている!』/堀米 薫・作/新日本出版社/2017. 7/¥1400/(913. 6)
	小高	『あぐり☆サイエンスクラブ:秋と冬、その先に』/堀米 薫・作/新日本出版社/2017. 10/¥1400/(913. 6)
	小高	『おれたちのトウモロコシ』(文研じゅべに一る)/矢嶋 加代子・作/文研出版/2017. 5/¥1300/(913. 6)
	小高	『ナイスキャッチ! 1~2』/横沢 彰・作/新日本出版社/2017. 6~/1~2共に¥1400/(913. 6)

★	小高	『なみきビブリオバトル・ストーリー 本と4人の深呼吸』/赤羽 じゅんこほか・作/さ・え・ら書房/2017. 6/¥1400/(913. 6)
	小高	『ビブリオバトルへ、ようこそ！』(スプラッシュ・ストーリーズ)/濱野 京子・作/あかね書房/2017. 9/¥1300/(913. 6)
★	小高	『ふたりのスケーター』/ノエル・ストレトフィールド・著, 中村 妙子・訳/教文館/2017. 11/¥1200/(933. 7)
	小高	『ぼくたち負け組クラブ』(講談社文学の扉)/アンドリュー・クレメンツ・著, 田中 奈津子・訳/講談社/2017. 11/¥1400/(933. 7)

■家族

★	小中	『拝啓、お母さん』(ものがたりの庭)/佐和 みずえ・作/フレーベル館/2017. 7/¥1300/(913. 6)
	小中	『ケータイくんとフジワラさん』/市川 宣子・作/小学館/2017. 5/¥1250/(913. 6)
	小中	『キワさんのたまご』(ポプラ物語館)/宇佐美 牧子・作/ポプラ社/2017. 8/¥1200/(913. 6)
★	小高	『メキシコへ わたしをさがして』/パム・ムニョス・ライアン・作, 神戸 万知・訳/偕成社/2017. 5/¥1500/(933. 7)
★	小高	『次元を超えた探しもの アルビーのバナナ量子論』/クリストファー・エッジ・作, 横山 和江・訳/くもん出版/2017. 10/¥1500/(933. 7)
★	小高	『奮闘するたすく』/まはら 三桃・著/講談社/2017. 6/¥1400/(913. 6)
★	小高・YA	『こんとんじいちゃんの裏庭』/村上 しいこ・作/小学館/2017. 7/¥1400/(913. 6)
	小高	『唐木田さんち物語』/いとう みく・作/毎日新聞出版/2017. 9/¥1400/(913. 6)

■昔の日本を舞台に

★	小中	『化けて貸します！レンタルショップ八文字屋』(物語の王国)/泉田 もと・作/岩崎書店/2017. 6/¥1300/(913. 6)
★	小高	『はっけよい！雷電』(文学の扉)/吉橋 通夫・著/講談社/2017. 3/¥1400/(913. 6)
★	小高	『こんぴら狗』(くもんの児童文学)/今井 恭子・作/くもん出版/2017. 12/¥1500/(913. 6)
★	小高	『狐霊の檻』(Sunnyside Books)/廣嶋 玲子・作/小峰書店/2017. 1/¥1500/(913. 6)
	小高	『西郷隆盛 上・下』/小前 亮・作/小峰書店/上・下共に2017. 10/上・下共に¥1400/(289. 1)
	小高・YA	『ひかり舞う』(teens' best selections)/中川 なをみ・著/ポプラ社/2017. 12/¥1500/(913. 6)

■ 神話・昔話・詩

★	小中	『絵物語古事記』/富安 陽子・文/偕成社/2017. 12/¥1600/(913. 2)
★	小中	『グリムのむかしばなし 1～2(全2巻)』/グリム・著, ワンダ・ガアグ・編・絵, 松岡 享子・訳/のら書店/2017. 7~/1～2共に¥1600/(943. 6)
★	小低	『プーカの谷 アイルランドのこわい話』(こぐまのどんどんぶんこ)/渡辺 洋子・編・訳/こぐま社/2017. 10/¥1200/(993. 23)
★	小低	『さてさて、きょうのおはなしは… 日本と世界のむかしばなし』/瀬田 貞二・再話・訳/福音館書店/2017. 1/¥1100/(908. 3)
★	小中	『月からきたトウヤーヤ』(岩波少年文庫)/蕭 甘牛・作, 君島 久子・訳/岩波書店/2017. 4(1969年刊の改訂)/¥640/(923. 7)
★	小高	『命の水 チェコの民話集』/カレル・ヤロミール・エルベン・編, 阿部 賢一・訳/西村書店/2017. 10/¥2300/(989. 53)
★	小低～	『自分におどろく』/たなか かずお・文/童話屋/2017. 7/¥1700/(911. 56)
	小低～	『ポケットのはらうた』/くどう なおこ・詩/童話屋/2017. 5/¥1700/(911. 56)
	小低～	『たぬきのたまご 内田麟太郎・詩集』(ジュニア・ポエム双書)/内田 麟太郎・著/銀の鈴社/2017. 10/¥1600/(911. 56)

■ そのほかに注目した本

	小低	『キダマッチ先生! 1 先生かんじゃにのまれる』/今井 恭子・文/BL出版/2017. 7/¥1300/(913. 6)
	小低	『サラとピンキー パリへ行く』(わくわくライブラリー)/富安 陽子・作・絵/講談社/2017. 6/¥1200/(913. 6)
	小低	『サラとピンキー ヒマラヤへ行く』(わくわくライブラリー)/富安 陽子・作・絵/講談社/2017. 10/¥1200/(913. 6)
	小低	『マウスさん一家とライオン』/ジェームズ・ドーハティ・作, 安藤 紀子・訳/ロクリン社/2017. 5/¥1500/(933. 7)
★	小中	『犬とおばあさんのちえくらべ 動物たちの9つのお話』/アニー・M. G. シュミット・作, 西村 由美・訳/徳間書店/2017. 3/¥1400/(949. 33)
★	小中	『アルバートさんと赤ちゃんアザラシ』/ジュディス・カー・作・絵, 三原 泉・訳/徳間書店/2017. 5/¥1400/(933. 7)
★	小中	『スイーツ駅伝』/二宮 由紀子・作/文溪堂/2017. 7/¥1300/(913. 6)
	小中	『時知らずの庭』/小森 香折・作/BL出版/2017. 5/¥1400/(913. 6)
	小中	『ほっとい亭のフクミちゃん ただいま神さま休業中』(偕成社おはなしポケット)/伊藤 充子・作/偕成社/2017. 12/¥1200/(913. 6)
	小中	『ネコの家庭教師』(福音館創作童話シリーズ)/南部 和也・さく/福音館書店/2017. 2/¥1700/(913. 6)
	小中	『口ひげが世界をすくう?!』/ザラ・ミハエラ・オルロフスキー・作, 若松 宣子・訳/岩波書店/2017. 11/¥1500/(943. 7)

	小中	『最後のオオカミ』(文研ブックランド)/マイケル・モーパーゴ・作, はら るい・訳/文研出版/2017. 12/¥1200/(933. 7)
	小中	『ライオンつかいのフレディ』(文研ブックランド)/アレグザンダー・マコール・スミス・作, もりうち すみこ・訳/文研出版/2017. 12/¥1200/(933. 7)
	小高	『河童のユウタの冒険 上・下』(福音館創作童話シリーズ)/斎藤 惇夫・作/福音館書店/上・下共に2017. 4/上・下共に¥2500/(913. 6)
	小高	『涙倉の夢』/柏葉 幸子・作/講談社/2017. 8/¥1600/(913. 6)
	小高	『ひいな』/いとう みく・作/小学館/2017. 1/¥1400/(913. 6)
	小高	『封魔鬼譚 1~3(全3巻)』/渡辺 仙州・作/偕成社/2017. 3~/1~3全て¥1200/(913. 6)
	小高	『笑う化石の謎』/ピッパ・グッドハート・著, 千葉 茂樹・訳/あすなろ書房/2017. 11/¥1500/(933. 7)
	小高	『ティディが宝石を見つけるまで』/パトリシア・マクラクラン・著, こだま ともこ・訳/あすなろ書房/2017. 11/¥1200/(933. 7)
	小高	『小さいママと無人島』/キャロル・ライリー・ブリンク・作, 谷口 由美子・訳/文溪堂/2017. 12/¥1600/(933. 7)
	小高	『ペーパープレーン』(ブルーバトンブックス)/スティーブ・ワーランド・作, 井上 里・訳/小峰書店/2017. 12/¥1400/(933. 1)

■復刊など

★	小低	『ビーおばさんとおでかけ』/ダイアナ・ウィン・ジョーンズ・作, 野口 絵美・訳/徳間書店/2017. 10/¥1700/(933. 7)
★	小中	『モルモット・オルガの物語』(みちくさパレット)/マイケル・ボンド・作, おおつか のりこ・訳/PHP研究所/2017. 12/¥1300/(933. 7)
	小中	『オルガとボリスとなかまたち』(みちくさパレット)/マイケル・ボンド・作, おおつか のりこ・訳/PHP研究所/2017. 12/¥1300/(933. 7)
★	小中	『とびきりすてきなクリスマス』(岩波少年文庫)/リー・キングマン・作, 山内 玲子・訳/岩波書店/2017. 10/¥640/(933. 7)
	小高	『魔法の学校 エンデのメルヒェン集』(岩波少年文庫)/ミヒヤエル・エンデ・作, 池内 紀ほか訳/岩波書店/2017. 1(原タイトル:Die Zauberschule und andere Geschichtenの抄訳 1996年刊の抜粋)/¥760/(943. 7)

■シリーズ続刊

	小低	『かわいいゴキブリのおんなの子メイベルとゆめのケーキ』(世界傑作絵本シリーズ)/ケイティ・スペック・作, おびか ゆうこ・訳/福音館書店/2017. 9/¥1500/(933. 7)
	小低	『ありづかのフェルダ』(世界傑作童話シリーズ)/オンドジェイ・セコラ・さく・え, 関沢 明子・やく/福音館書店/2017. 3/¥1600/(989. 53)
★	小中	『水の森の秘密』(こそあどの森の物語)/岡田 淳・作/理論社/2017. 2/¥1700/(913. 6)
★	小中	『パティントン、テストをうける』/マイケル・ボンド・作, 三辺 律子・訳/WAVE出版/2017. 11/¥1400/(933. 7)

小中	『パディントンのどろぼう退治』/マイケル・ポンド・作, 三辺 律子・訳/WAVE出版/2018. 1/¥1400/(933. 7)
小中	『11歳のバースデー 5 ぼくたちのみらい』(くもんの児童文学)/井上 林子・作/くもん出版/2017. 2/¥1100/(913. 6)
小中	『オバケとキツネの術くらべ』(スギナ屋敷のオバケさん)/富安 陽子・作/ひさかたチャイルド/2017. 3/¥1300/(913. 6)
小中	『妖怪一家のハロウィン』(妖怪一家九十九さん)/富安 陽子・作/理論社/2017. 9/¥1300/(913. 6)
小中	『まほろ姫とにじ色の水晶玉』/なかがわ ちひろ・作/偕成社/2017. 12/¥1300/(913. 6)
小中	『バクのバンバン、船にのる』(ふたりはなかよしマンゴーとバンバン)/ポリー・フェイバー・作, 松波 佐知子・訳/徳間書店/2017. 1/¥1400/(933. 7)
小中	『見て! わたしの魔法』(見習い魔女ベラ・ドンナ)/ルース・サイムズ・作, 神戸 万知・訳/ポプラ社/2017. 6/¥1200/(933. 7)
小高	『ペンダーウィックの四姉妹 3 海辺の音楽』(Sunnyside Books)/ジーン・バースオール・作, 代田 亜香子・訳/小峰書店/2017. 6/¥1700/(933. 7)
小高	『キキとジジ 魔女の宅急便特別編 その2』(福音館創作童話シリーズ)/角野 栄子・作/福音館書店/2017. 5/¥1200/(913. 6)
小高	『ジュディ・モードのビッグな夏休み』(ジュディ・モードとなかまたち)/メーガン・マクドナルドほか・作, 宮坂 宏美・訳/小峰書店/2017. 7/¥1400/(933. 7)
小高	『ジュディ・モード、ラッキーになる!』(ジュディ・モードとなかまたち)/メーガン・マクドナルド・作, 宮坂 宏美・訳/小峰書店/2017. 10/¥1400/(933. 7)
小高	『フォックスクラフト 2 アイラと長老たちの岩(全3巻)』/インバリ・イセーレス・著, 金原 瑞人ほか・訳/静山社/2017. 10/¥1600/(933. 7)
小高	『落語少年サダキチ に』/田中 啓文・作/福音館書店/2017. 11/¥1500/(913. 6)
小高	『アーチャー・グリーンと錬金術師の呪い』(アーチャー・グリーンと魔法図書館 2)/D. D. エヴェレスト・著, こだま ともこ・訳/あすなる書房/2017. 1/¥2200/(933. 7)
小高	『かえたい二人』/令丈 ヒロ子・作/PHP研究所/2017. 9/¥1300/(913. 6)

■ブックリストなど

★	大人	『物語の森へ』(児童図書館基本蔵書目録)/東京子ども図書館・編/東京子ども図書館/2017. 5/¥3600/(909. 031)
★	大人	『子どもの本から平和を考える』/児童図書館研究会・編/児童図書館研究会/2017. 2/¥1250/(319. 8)
★	大人	『おはなし会がはじまるよ 特別支援学校(肢体不自由校)での図書館活動』/おはなしの会うさぎ・編/おはなしの会うさぎ/2017. 4/¥500/(019. 5)

公益財団法人図書館振興財団

第18回 子どもの本 この1年を振り返って 2017年 講演録

■フィクションの部■

講演：公益財団法人図書館振興財団 児童書選書委員会 小野寺 千秋

小野寺千秋と申します。私は、東京都区内の図書館で非常勤職員として働いています。この発表は、図書館振興財団の児童書選書委員として行わせていただきます。児童書選書委員会（以下「選書委員会」）では毎月1回定例会を開催し、その月に出版された児童書に目を通しています。その中で選ばれた課題の本について、翌月の定例会で意見を交わし合います。毎回3時間程度の密度の濃い話し合いが行われ、それが選書委員会の基盤となっています。本日は選書委員会で話題となった作品を中心に、私が読んで良かった本、好きだなと思った本を交え、紹介していきたいと思います。

■紹介したいと思える本の少なかった1年

今年のフィクションは、ここ数年のうちでも最も本が少なかったという印象を持っています。出版数自体は減っていないと思いますが、抄訳とも言えない漫画的な本や、軽く読めるシリーズものが増えていて、じっくり読んで物語の世界を楽しめる本が少なかったと感じています。

特に、低学年や中学年向きで、子どもたちに薦めたい本が本当に少なかったように思います。高学年やYA向けの作品では読み応えのある本がありました。ただ、高学年以上の子どもの読書力は、やはり低学年・中学年のうちによい本を読んできたかどうかにかかっていると思いますので、子どもたちの心の栄養となるような本がたくさん出てきてほしいと思っています。

■さまざまな状況に生きる子どもたち

それでは早速、本を紹介していきたいと思います。

最初のテーマは「さまざまな状況に生きる子どもたち」としました。ここ何年かの傾向ですが、障害やLGBTなど、生きることに課題を抱えている子どもたちを描いた作品の対象年齢が低くなってきていて、小学校高学年でも読めるものがたくさん出版されています。外国の作品が中心ですが、課題を抱えた子どもたちの気持ちが丁寧に描かれ、心に響く作品が多いように思います。今年は特に、周囲の大人がそうした子どもたちにきちんと関わることで、彼らが自分に自信を持って変わっていくという作品が印象に残りました。

まず『ぼくとベルさん』です。20世紀のカナダを舞台に、ディスレクシア（識字障害）である少年エディが発明家のグラハム・ベルと出会います。ベルはエディが賢い子だと気づき、目をかけます。エディはベルに刺激を受けて、自分なりに工夫して勉強に励むようになり、家族からも認められていきます。グラハム・ベルは、奥さんが耳の聞こえない人だったということもあり、耳の不自由な人を支援していたそうです。この物語にはヘレン・ケラーが登場しますが、ベルは実際にヘレン・ケラーとの交流もあったそうです（p.222「訳者あとがき」より）。このヘレ

ンとの出会いも、エディに大きな影響を与える印象的なエピソードでした。実在の人物が登場するので「普段伝記などは読むけれど、物語はあまり」という子どもにも、薦めやすい本ではないかと思いました。

続いて『木の中の魚』です。こちらは現代を舞台にした、難読症の少女アリーの物語です。アリーは自身が文字をうまく読めないことを周囲に隠しており、わざと問題児のように振る舞っています。なぜ自分はいかに文字が読めないのか分からず、大人に叱られてばかりの毎日で、自己嫌悪を抱えています。そんなアリーのクラスに新しい担任としてやってきたダニエルズ先生は、彼女の独創的な発想力や物事を深く考えられる力に気づき、彼女がうまく勉強できるよう手を差し伸べてくれます。アリーが自分に自信を持ち、次第にクラスの中でも力を発揮し、輝いていく姿がとても印象的な物語です。また、彼女の個性をしっかりと受け止め、付き合う友人たちの存在もとてもよいと思いました。

『ぼくはO・C・ダニエル』は、強迫性障害を持った少年ダニエルが主人公です。英語で強迫性障害を「OCD」と呼ぶそうで、「OCD」の「D」とダニエルの「D」をかけて『O・C・ダニエル』というタイトルになっています。ダニエルは、毎日何度もふとしたきっかけで強烈な不安と恐怖に襲われますが、その理由は自分でも全く分かりません。例えば、夜眠る前には手を洗ったり、電気のスイッチをつけたり消したりという行動を繰り返します。そのルールが違ふとやり直して、毎日2～3時間、時には5時間ほどかけて、その「儀式」と呼ぶ行動を繰り返します。読んでいるだけでも非常に辛いですが、ダニエル本人は、それが強迫性障害という名前を持った症状だと分からず、ただ「自分がいかれている」と感じています。そして彼は、家族にも学校の友達にもそのことを一切打ち明けず、一人でこの症状と闘っていました。

そんなある日、学校内で有名な変わり者の少女が、ダニエルに声を掛けてきます。普段、誰とも口を利かない彼女がダニエルに頼んできたのは、父親を殺した犯人を捜すことでした。ダニエルの毎日の生活の大変さや、心のありようがとてもよく描かれつつ、ミステリー的な要素もあり、ドキドキしながら楽しめる作品です。実際、この作品はミステリー作品に贈られる「エドガー賞児童部門」を受賞しています（注1）。この本は前の1冊よりもややグレードが高いため、YAにもお薦めできます。

障害を抱えた子どもたちを描いた作品を3冊紹介しましたが、続いて、普段私たちがなかなか知る事のない、世界の様々な地域に暮らす子どもたちを描いた作品を紹介します。

『タイガー・ボーイ』は、インドからバングラデシュにまたがるシュンドルボン地区を舞台にしています。シュンドルボンは、ユネスコの世界自然遺産にも登録されている国立公園があり、貴重な動植物の保護区にもなっている場所です。主人公のニールは、この保護区に近い、小さな貧しい村に住んでいます。成績は学校で一番、周囲からは奨学金をもらって都会の学校へ行くことを期待されていますが、本人はこの村が大好きで、家族からも離れたくないので勉強に身が入

りません。そんなとき、ベンガルトラの赤ちゃんが保護区から逃げ出すという事件が起こります。この赤ちゃんトラをブラックマーケットで売ろうという悪い大人の企みを知ったニールは、誰よりも先に赤ちゃんトラを見つけて、保護区を守るレンジャーに手渡そうと決意します。それが、まさに命がけの大冒険となるのですが、ニールは大好きな地元の島を守るため、その島を知り尽くしている自分がしっかりと知識を身に付けていかないといけないと実感します。自然災害や貧困の問題など様々な問題がすっきりとまとめられ、短い物語に収められています。

見た目かなり薄い本ではありますが、中身がとても濃い本です。挿絵の雰囲気も物語にとってもよく合っています。著者ミタリ・パーキンスさんは、2010年に課題図書としても選ばれた(注2)、バングラデシュが舞台の『リキシャ★ガール』(鈴木出版、2009年10月刊)を書かれた方です。先程の『ぼくはO・C・ダニエル』もこの『タイガー・ボーイ』も、鈴木出版の「この地球を生きる子どもたち」というシリーズの本です。2004年からこのシリーズは続いています。色んなテーマで世界の子どもたちの姿を描いていて、お薦めできる作品も多いです。

『わたしも水着をきてみたい』は、スウェーデンに住むソマリアからの移民、ファドマという女の子の物語です。ファドマはイスラム教徒であるため、人前で水着を着て泳ぐことができません。そのため、スウェーデンの学校に通うようになって、プールの授業は見学。しかし、他の子たちの泳ぐ姿を見ているうちに、ファドマも水着を着て泳いでみたいという気持ちが膨らんできます。そんなファドマに水泳の先生が教えてくれたのは、女性だけで行う水泳教室でした。実際にスウェーデンでは、イスラム教の国からの移民のために、女性のための水泳教室が開かれています。しかも、その教室にも通わせてもらえないような厳しい家庭の子どもたち、泳ぎたいけれども泳ぐことを許してもらえない家庭の子どもたちのために、現在では水泳教室の参加が義務づけられているということです。移民の人々の信仰にも寄り添う、スウェーデンという国のありようが分かる物語だと思います。挿絵も多くて薄い本ですが、移民というテーマを考えると、この物語をよく理解できるのは高学年くらいからかなと思います。

■戦争

次は戦争の本です。今年あまり戦争の本は多くありませんでしたが、中でも一番お薦めは、『ファニー13歳の指揮官』です。これは、本当にたくさん子どもたちに読んでもらいたいと思う本でした。こちらの紹介はヤングアダルトの部でお任せしていますので、外国の作品からは『いのちは贈りもの』を紹介します。

これは、著者の戦争体験に基づいたノンフィクションで、もしかしたら高学年でも読むのが難しいかもしれません。このお話の主人公は、ユダヤ人の少女フランシーヌです。9歳で捕らえられ、丸3年もの間、収容所で暮らしました。収容所での生活は過酷を極めたものですが、それでもフランシーヌは、父親が戦争捕虜となっていたために国際条約で守られ、母親と一緒に暮らすことができました。とても悲惨な生活ではありますが、そういった幸運もあったために、通常では3カ月と持たない収容所の生活を3年もの間、耐え抜くことができました。戦争捕虜の家族がそういった条約で守られ、収容所でもそのような待遇を受けていたことは、私自身も知りませんでした。解放後もフランシーヌは長い間、収容所でのつらい記憶に苦しめられました。周囲か

らぶしつな質問をされたり、心ない仕打ちを受けたこともあったなど、非常にリアルに淡々と事実をつづった本です。

ホロコーストについての知識があるほうが分かりやすいかもしれません。厳しい描写もあるため、中学生以上にお勧めです。関連する地名の載った地図のほか、巻末にフランシーヌの写真、年譜なども載っています。

続いて日本の作品です。「すごくお勧め」という本があまりない中、これまでの戦争を描いた作品とは異なり、少し変わった視点で書かれたものがありました。紹介するのは『お母さんの生まれた国』です。主人公である未来のお母さんは、カンボジア人です。未来は、母親が40年前に内戦から逃れて日本にやってきたことは知っていましたが、幼い頃の体験について聞かされたことはありませんでした。母親が生まれた国について興味を持ち始めたとき、夏休みにカンボジアを訪れることとなります。そして、いまだに地雷の埋まっている地区や内戦の爪痕がたくさん残された場所などを見に行き、未来は初めて、幼い頃のお母さんの苦労を知ります。戦争を真正面から描いた作品ではありませんが、カンボジアという国が今も抱えている深刻な問題や、人々の心に残された深い傷痕を知ることのできる物語です。日本ではあまりなじみのないカンボジアについて、日本の子どもの目線で描かれているので、親しみやすいと思います。

■幼年文学

次は、幼年文学を紹介します。大日本図書の「こころのほんばこ」と、こぐま社の「こぐまのどんどんぶんこ」というシリーズです。

「こころのほんばこ」からは『たんけんクラブ シークレット・スリー』を紹介합니다。2人の少年と新しくやってきた離れ島の灯台守の少年、この3人が秘密の暗号で手紙をやりとりし合います。海や船、キャンプなど、楽しい要素のいっぱい詰まった作品です。暗号を解く楽しみもある本です。文字もかなり大きく、一人読みを始めた子どもにも勧めやすいと思います。青と黄色の3色刷りの挿絵もすごく雰囲気がいいです。

続いて「こぐまのどんどんぶんこ」から、アリソン・アトリーの『小さな赤いめんどり』を紹介します。1969年に大日本図書から刊行された作品で、当時と同じく神宮輝夫さんが翻訳をされています。少し修正が入っているそうです（奥付より）。挿絵は新しくされていて、どこか今風の感じがするように思います。おばあさんと赤いめんどりが心を通わせて、めんどりを狙う泥棒の手から逃れるというお話です。一人読みをまだ始めたばかりという子には若干、次の展開までのストーリーが長くはありますが、低学年にも十分読める作品です。

『とうふやのかんこちゃん』。豆腐作りに悩んでいた豆腐屋さんの娘のもとに、豆腐のうまみが分かるキツネのぼっさまがやってきます。豆腐作りの歌を教え、豆腐がおいしくできているかを毎日見てくれます。葉っぱが1枚だったら「少しだけ」、葉が多いと「とてもおいしい」といった調子で、お父さんは「いっぱい葉っぱをもらおうぞ」とがんばって豆腐を作ります。子どもたちに安心して勧められる物語です。

『ツトムとネコのひのようじん』は、にしかわおさむさんの「ツトム」シリーズです。いつも動物とばかり遊んでいるツトムのお話。ほんわかとしていて、内容もすごく優しいものです。文字も大きく、この本も、まだ本を読み始めの年頃の子どもたちにもとてもお薦めの本です。猫が家にやって来る話などありますが、うちにもこんなかわいい猫がたくさん来たらいいなと思いました。短編ですぐに読めるので、ぜひ1年生にもお薦めしてください。

次は、「メリーメリー」シリーズから、『メリーメリーおとまりにでかける』。今年3作が刊行されています。1999年に大日本図書から刊行された『すえっこメリーメリー』という作品がありましたが、訳も新しくなり、岩波書店から出版されました。危なっかしいのに妙に要領がいい5人きょうだいの末っ子、メリーメリー（本名はメリー）が活躍する楽しいお話です。内容は幼児から十分に楽しめますが、文字が小さく挿絵もすごく少ない本です。低学年の子どもが自分で読むには難しいかもしれません。1つのお話が短編のため、小さい子どもには、ぜひ大人の方が読んであげてほしいと思います。新訳では1冊に5話ずつ、全15話が収められています。

■学校・友達

続いて「学校・友達」でまとめました。

低学年向けでは、『ともだちのときちゃん』を紹介します。小学校2年生のさつきはおしゃべりが上手で、「なんでも知ってるね」といつも大人たちに褒められている、はきはきとした女の子。隣の席のときちゃんは、何をするのもゆっくりで、言葉数もすごく少ない子です。そんなときちゃんを、いつももどかしく思っているさつきですが、物事をじっくり観察し、色々なことを考えているときちゃんと一緒にいるうち、さつきには、何でも知っていると思っていた世界が今までとは違って見えてきます。岩瀬成子さんらしい優しい物語です。主人公は2年生で、低学年にも読めるとは思いますが、このお話の機微を感じ取るには、読み手を選ぶかもしれません。中学年で読んでもよいかもしれないと思った作品でした。

「傾向」というほど大げさなことではないかもしれませんが、今年のフィクションでは「転校生」がよく登場しました。転校してきた子どもが、慣れない環境の中で自分の居場所を見つけるお話や、個性的な転校生がやってきてクラスに新風を巻き起こすといったものもありました。

『レイナが島にやってきた!』は、新風を巻き起こす物語です。主人公は、奄美大島にやってきた女の子レイナ。転校初日から遅刻してきたと思ったら、ガジュマルの木の上で歌を歌っていたり、かなり型破りな女の子です。島の小さな学校の生徒たちは、びっくりしつつもレイナに惹きつけられ、彼女はたちまち人気者になります。しかし、レイナは里子となって島にやってきたという事情もあり、人知れず心配事も抱えています。物語の雰囲気合った、元気のいい表紙や挿絵もよいです。

『ぼくらの山の学校』は、山村留学を題材にした物語です。このところ、家や学校に自分の居場所を見つけられなかったりなど、心にもやもやを抱えた子どもたちが、田舎や外国など遠い場所で癒されるという作品が増えてきているように感じます。この物語も、ちょっとしたきっかけ

からクラスの中で浮いてしまい、家族にも腫れ物のように扱われるようになってしまった少年が主人公。テレビで見た山村留学センターに惹かれ、そこに行こうと決意します。自然の中で釣りや虫取りをしたり、季節ごとに様々な行事に参加したりと、読んでいてうらやましくなるような、里山での楽しい生活が描かれています。物語のモデルは、愛媛県に実在する山村留学センターであるそうです（p. 222「あとがき」より）。

『あした飛ぶ』。これも主人公が転校生です。6年生の星乃という女の子が父親を亡くしたために、母の故郷の島に引っ越してきます。クラスの誰とも口を利かず、心を閉ざしていた星乃。そんなある日、「アサギマダラ」という日本列島を旅するチョウを捕まえるための学校行事が行われますが、1匹のチョウの羽にマーキングがされているのを見つけます。実際、生態調査のため、捕獲したアサギマダラの羽にマーキングをする活動が全国のあちこちで行われているようですが、マーキングされたチョウを捕えることは非常に珍しいそうです（注3）。偶然にもそのチョウを捕まえた星乃ですが、マーキングをしたリュウセイという少年と出会ったことで、少しずつ心を開いていきます。ストーリーも挿絵も、女の子っぽい雰囲気です。ただ、表紙のチョウの絵がアサギマダラに見えないのでは、という指摘もありました。

次は『ソーリ！』です。1年生のとき、七夕の短冊に「そうりだいじんになりたい」と書いて笑われたことをきっかけに、あまり自分を出せなくなってしまった照葉。しかし、5年生になったときに、クラスで目立つグループの子たちが他の子に意地悪をしたり、勝手な振る舞いをしたりするのを目にし、ついに照葉の怒りは爆発。グループのリーダー格の女の子と、クラス委員の選挙で対決することになります。さらに持ち前の正義感から、「社会を良くしたい」と政治や国際貢献についても考えはじめ、国会議事堂に見学に行ったり、国際交流のボランティアの手伝いも体験したりします。ごく身近な物語の中に、社会的なテーマがうまく織り込まれ、元気良くテンポ良く読める作品でした。挿絵もよい感じでした。

『香菜とななつの秘密』。大人しくて人前で話したりすることは苦手だけど、観察眼に優れた5年生の香菜が、学校の中のちょっとした秘密や違和感に気づき、その謎を解明していく7話の短編です。選書委員会のメンバーからは、「こういう本を好む子どもがいるし、そういった子に薦めたい」という意見と、「主人公の香菜が、少し落ち着きがあり過ぎて、大人っぽ過ぎる」という意見とで好みが分かれた作品です。登場人物に悪人がいないところがよいと思います。ちょっとした謎解きも楽しめる本なので、薦めたい子どもが思い浮かんだら、紹介するとよいと思います。

ビブリオバトルを題材にした本も何冊か出ました。『なみきビブリオバトル・ストーリー』は、4人の作家による短編集です。ビブリオバトルに出場する小学生4人の目線で、4人の作家が1話ずつ書いています。それぞれの出場者が何を紹介するか、本を選ぶところから、観客に伝わるアピールの仕方を考え、実際にバトルに挑戦する様子が描かれます。物語に色々な児童文学作品が登場するところもよいと思いました。ビブリオバトルも、実施している学校が増え、かなりメ

ジャーなイベントになったと思います。図書館員の方々は、人が集まるかどうか心配でドキドキした、という司書のお姉さんの言葉に共感するかもしれません。

続いて、『ふたりのスケーター』は、第2次世界大戦前のお話です。裕福だけど孤独な少女と、慎ましい暮らしだけど仲のよい大家族に生まれた少女。全く違う環境で育った2人のスケートを通じた友情の物語です。出会った日からたちまち仲良くなった2人は、最初はよい影響を与え合いますが、スケートという同じ競技を通じて次第にライバルとなっていき、確執も生まれます。そんなときにも、大人が2人の子どもたちをきちんと見守り、時にはやや厳しく導いていきます。時代も感じさせる物語ですが、児童文学の良さが詰まった作品です。

■家族

次は、「家族」をテーマにした作品を集めました。

『拝啓、お母さん』です。妹が産まれるのを楽しみにしていた4年生のゆなは、体調が思わしくない母親が入院するために、夏休みの間、九州の祖母の家に預けられることとなります。お母さんの近くにいたいのに遠くに行かされることになり、ゆなはお母さんにひどい言葉をぶつけて九州に行ってしまう。祖父母の家は活版印刷所でした。膨大な数の活字の中から1つ1つ拾って並べる活版印刷に、ゆなも興味を持ちます。そして、自分で拾った活字の印刷で、母に手紙を書こうと思いつきます。ゆなの手紙の箇所は、実際に活版印刷で印刷され、独特で少しでこぼこのある優しい風合いの印刷を見ることができます。活版印刷や印刷所の仕事についても知ることができる、温かみのある物語でした。

続いて『メキシコへ わたしをさがして』です。5年生のナオミと生まれつき体に障害のある弟のオーウェンは、幼い頃母親に捨てられるような形でひいおばあちゃんのところへ預けられ、3人で暮らしています。ところがある日突然、ナオミたちの所に母親がやってきて、障害のないナオミだけを引き取りたいと言ってきます。身勝手な母親から逃れるため、ナオミたち家族はメキシコにいる父親を探しに行きます。最初から最後まで、母親が子どもたちを顧みないことが本当に悲しくなりますが、ひいおばあちゃんなど、他の大人たちの温かさに救われます。また、彫刻の得意なナオミが、メキシコで彫刻を見て、自身のルーツをはっきりとそこに感じ取るシーンが印象的です。メキシコのお祭りのことなどについても分かる物語でした。

『次元を超えた探しもの』。主人公アルビーの両親は、2人とも名のある科学者。しかし母親がガンで亡くなってしまい、父からパラレルワールドの話聞いたアルビーは母のまだ生きている世界がどこかにあると信じ、量子物理学の実験を始めます。そしてなんと、バナナと猫を使って、見事パラレルワールドへの移動を成功させます。母を探していくつもの世界を渡り歩いたアルビーは、母に出会うことができるのでしょうか。難しい理論などについても書いてありますが、それでも問題なく読める物語です。物語の本質は「家族」なのだと思います。忙しくて存在感の薄い父親との最後の場面が印象に残りました。科学好きの子どもに、物語に親しむ本として紹介できたらよいと思います。出版社は意識して、男の子に手に取ってもらえるような装丁にしたそ

うです。

昨年の夏頃、介護をテーマにした作品が2冊続けて出版され、目を引きました。まはら三桃さんの『奮闘するたすく』、そして、村上しいこさんの『こんとんじいちゃんの裏庭』です。2人とも、とても力のある作家の方々です。

『奮闘するたすく』は5年生の佑が主人公です。夏休みの自由研究で、祖父が通う介護施設のデイサービスについてレポートすることになります。祖父は元刑事で厳しい人物でしたが、認知症で変わってきてしまい、佑は祖父に対して少し複雑な思いを抱えています。そんな彼が施設に通うようになり、十人十色のお年寄りたちと楽しく触れ合う物語です。施設にはインドネシアからの介護実習生がいたり、介護の現場が小学生の目線でリアルに描かれています。登場人物のキャラクターが特徴的で、ミステリー的な要素もあり、楽しく読み進められます。重いテーマを明るく前向きに、児童が読める物語としてうまく書かれているのはさすがです。

もう1冊の『こんとんじいちゃんの裏庭』は、中学3年生のユウトが主人公です。認知症の祖父が交通事故に遭い意識不明となりますが、心配する家族に対し、加害者は車の修理代を損害賠償請求してきます。納得のいかないユウトは、事故の真相を突き止めようと動き出します。学校でも大人のずるいところに心底うんざりして腐っていたユウト。この物語では祖父の認知症は重く、ユウトたち家族が同居して面倒を見ている。介護疲れしている母親など、『奮闘するたすく』よりも状況は深刻です。また、加害者やその代理の保険会社の社員の対応など、きれい事だけでは済まない現実もシビアに描いています。厳しい話ですが、その中にも救いというか、少しほっとするような部分もあり、結末も爽やかでした。

同じテーマでも全く違う2冊ですが、『こんとんじいちゃんの裏庭』は、少々重い物語であるため、対象はYAであるように思います。その一方で表紙はやや児童向けに見え、選書委員会では、YAの子たちが手に取るだろうかという意見もありました。

『奮闘するたすく』は、表紙の印象と対象の読者が合っているように感じますが、ページ数にボリュームがあります。どちらの本も対象としている読者にうまく届けるために、工夫が必要かもしれません。

■昔の日本を舞台に

ここ何年か、昔の日本を舞台にした物語が多くなってきています。子どもたちにも読みやすいものを何冊か紹介します。

最初は『化けて貸します！ レンタルショップ八文字屋』。江戸時代の損料屋が舞台です。実はこの八文字屋は、主人が人間とタヌキのハーフ。店の者も全てタヌキです。お客さんの望んでいる品物にタヌキが化けて貸し出すため、イメージにピッタリの品物が用意できて評判も上々。小さいながら、なかなか繁盛しているお店です。その八文字屋に、初めて人間の少年が奉公することになり、色々な騒動が起こります。表紙の絵も親しみやすく、さほど厚くないので手に取りやすい本です。文字が少し小さく、挿絵もありますが難しい話ではないので、中学年あたりから読めるかと思います。

次は『はっけよい！雷電』。これは、江戸時代にタイムスリップしてしまった少年が、当時の最強力士、雷電関に出会って江戸の町で起こる事件に巻き込まれるお話です。少年が意外に博識で相撲や落語、てんぷらの作り方で知っていて、その知識を生かして活躍します。著者は吉橋通夫さん。吉橋さんの作品としては少し軽めですが、読みやすい作品でした。

『こんぴら狗』。これはかなり分厚い本ですが、香川県にある金毘羅さんへのお参りに犬を行かせるという、江戸時代に実際にあった風習を題材にした物語です。病にたたられたある一家が娘の治癒を願い、飼い犬を金毘羅さんへお参りに行かせます。もちろん犬だけでは行けないので、首に「こんぴら狗」と分かるようにお札を下げて、人間が手から手へ犬を渡して、お参りを成し遂げさせるのです。江戸時代の人々の信心深さや人情が感じられる物語でした。今年は成年なので、ぜひご紹介ください。

続いて『狐霊の檻』です。力のあるファンタジーが少なくなっている中、目を引いた作品です。ある強欲な一族が自分の繁栄のために、土地の守り神のような存在である狐霊を捕まえて屋敷に閉じ込めていました。狐霊の力でその一族は繁栄を極めます。その一族の屋敷に売られてきた少女が、この狐霊と心を通わせ、自由を手に入れるというストーリーです。表紙の絵が少し独特の雰囲気がありますが、とてもうまくまとまっていて、面白い物語でした。

■神話・昔話・詩

次は「神話・昔話」です。

古典が児童書でも刊行されるようになり、中には古事記もいくつかありましたが、今年は富安陽子さんの『絵物語古事記』が出版されました。「子どもたちにも分かりやすい古事記を」と語り口調で書かれたこの本には、古事記の上・中・下巻のうち、上巻の神話が収められています。富安さんは絵物語とすることにもこだわられていて、240ページ以上ある全てのページに挿絵が掲載されています。挿絵を担当されたのは、富安さんと「妖怪一家九十九さん」シリーズ（理論社）などでコンビを組んでいる山村浩二さんです。これほど多くの絵を描かれたご苦労も偲ばれます。

外国の昔話では、松岡享子さんがワルダ・ガアグによる『グリムのむかしばなし』を訳されました。これが2巻出版されています。こちらも松岡さんがかなり力を入れられていて、今年あちこちで「訳すのがとても楽しかった」と語っていらっしゃるので（注4）、直接お聞きになった方もいらっしゃるかもしれません。そんなガアグの『グリムのむかしばなし』は、ぜひ声に出して読んでいただきたいです。これまでの様々なテキストのグリムとは、少し違う感じですが、お話によっては語り向きか、向いていないものもあるかもしれません。表紙や挿絵も素敵です。

『プーカの谷』はアイルランドの怖い話、昔話を3話収めた本です。幼年文学で紹介した「こぐまのどんどんぶんこ」の1冊でお話も挿絵も少し怖いですが、低学年でも十分読める話です。

瀬田貞二さんの生誕100年記念で、瀬田さんが翻訳された昔話を1冊にまとめた『さてさて、きょうのおはなしは…』が福音館書店から出版されました。対象は低学年としましたが、子どもが自分で読むというよりは、語りのテキストとして使われることを意識して作られた本であるように思います。マーシャ・ブラウンの『三びきのやぎのがらがらどん』やロシア民話『おだんごばん』など、絵本でもおなじみの話も収録されています。

『月からきたトウヤーヤ』。中国のチワン族という文字を持たない少数民族に伝わる民話を基にした創作民話です。この1冊で1つのお話ですが、昔話の雰囲気をつぶり持っていて、中学年くらいの子どもの薦めたい本です。「岩波少年文庫」として刊行されるにあたり、訳文を見直し、若干手を加えたとあります（p. 189「少年文庫版によせて」より）。

『命の水』は西村書店から出版された、チェコの民話集です。「チェコのグリム」と呼ばれたエルベンによって集められた昔話です。チェコの昔話というと、岩波書店の『金色の髪のお姫さま』（2012年11月刊）を思い出す方も多いと思いますが、そちらもエルベンによるものです。文章の感じがだいぶ違うので、ぜひ読み比べてみてください。挿絵は出久根育さんが描かれています。

続いて「詩」の本から1冊だけ紹介します。童話屋の創始者で、工藤直子さんの『のはらうた』など多くの本を出している田中和雄さんによる詩の本です。『自分におどろく』。あべ弘士さんの挿絵が、詩のイメージにとっても合っていてよいと思いました。

■そのほかに注目した本

「そのほかに注目した本」として、面白いと思った本を図書リストに挙げています。今回、中学年向けの本が少なかったため、この中から中学年向けの本を少し紹介したいと思います。

『犬とおばあさんのちえくらべ』は、『イップとヤネケ』（岩波書店）などを書いたアニー・M. G. シュミットさんの短編集です。昔話のようなお話もあり、短くて読みやすいので、中学年くらいの子、本を読み慣れない子どもたちに薦められると思います。表紙の雰囲気も良く手に取りやすい本です。これまでも、同じような短編集が徳間書店から2冊出ていて、今回が3冊目です。

『アルバートさんと赤ちゃんアザラシ』は、『おちやのじかんにきたとら』（童話館出版）のジュディス・カーによる物語です。人生の目標をなくしていたアルバートさんが、母親を亡くした赤ちゃんアザラシを家に連れて帰ります。厳しいアパートの管理人に隠れて、お風呂場やベランダでこっそりアザラシを飼うという愉快なお話です。なんと著者が90歳を越えてから書かれた上、この物語が実話を基にしているということも驚きです（p. 132「作者あとがき」より）。温かくて面白くて、色々驚きです。今年の中学年向けの本で一番のお薦めです。

次は『スイーツ駅伝』です。これは今年、選書委員会からも「面白かったで賞」（？）の声か

挙がった作品です。ちょっとくだらなくて文句なく笑える、二宮由紀子さんの作品です。

■復刊など

復刊からは、『ビーおばさんとおでかけ』。ダイアナ・ウィン・ジョーンズさんの『魔法！魔法！魔法！』（徳間書店、2007年12月刊）という短編集から、低学年でも読めるように1話1冊で刊行された本です。佐竹美保さんの挿絵が素敵です。

『モルモット・オルガの物語』。1976年に『オルガ・ダ・ポルガ物語』（富山房）という作品が刊行されていますが、新しい訳になり、以前のものとは挿絵も装丁も大きく変わりました。少し分厚いですが、中学年が読めるお話です。

『とびきりすてきなクリスマス』は1990年にハードカバーで岩波書店より出版された作品で、今回「岩波少年文庫」になりました。優しくてとても素敵な作品です。これもぜひ中学年に薦めてもらいたい本です。挿絵も素敵です。

■シリーズ続刊

シリーズの中から2冊紹介します。「こそあどの森の物語」が、この『水の森の秘密』で完結となりました。1994年から長く続いた定番の児童書シリーズです。

続いては映画化がきっかけだと思いますが、「パディントン」シリーズの未訳の作品がWAVE出版から刊行されました。挿絵に色が付いていたり、福音館書店版を見慣れている方には若干違和感があるかもしれませんが、これまで訳されていなかったものですので、続きと見なしてもよいかもしれません。訳は三辺律子さんです。これまでのシリーズで馴染みのある言葉などは、松岡享子さんの訳を踏襲されている部分もあるようです（pp. 222～223「訳者あとがき」より）。

■ブックリストなど

最後にブックリストを紹介します。

東京子ども図書館の「児童図書館基本蔵書目録」『物語の森へ』です。2012年に『絵本の庭へ』が刊行されていますので、その2巻目です。フィクションを取り扱っています。公共図書館では持っているといいかもれません。

2冊目は『子どもの本から平和を考える』です。児童図書館研究会主催の、山花郁子さんの講演会の内容を中心に、戦後70年の際の機関誌の記事などを集めています。巻末に戦争関連のブックリストがありますので、ブックトーク等で参考にしてください。戦争の悲惨さを伝える本は、世の中が平和でなければ刊行できないと思います。これからも、戦争について語り継ぐ本が出続ける日本であってほしいと思います。

最後に、特別支援学校での読み聞かせの活動をつづった『おはなし会がはじまるよ』を紹介し

ます。障害児への読み聞かせ活動が盛んになってきて、悩まれている方の道しるべとなる本です。この本を作った「おはなしの会うさぎ」の皆さんも、悩みつつたくさんの実践を重ね、その取り組みを、同じように悩んでいる方々に届けたいという気持ちで自費出版されたそうです。おはなし会のプログラムや、どのような本をどう読んだら子どもたちに届くのか、そういったことが紹介されている実践的な内容です。様々な子どもたちに本の楽しさを伝えていくべき私たちにとって、貴重な本だと思います。一般の流通に乗らない本であるため、情報提供させていただきました。ご興味のある方は、ぜひご覧になってみてください。

以上、皆さんどうもありがとうございました。

(於：株式会社図書館流通センター 2018年3月12日・13日)

※本図書リストおよび講演録の無断転用・複製は固くお断りいたします。

注

1) すずき出版 「海外児童文学シリーズ」

「ぼくはO・C・ダニエル」

<http://www.suzuki-syuppan.co.jp/script/detail.php?id=1050023596>

最終確認日：2018年6月7日

2) 公益社団法人全国学校図書館協議会

「第56回 青少年読書感想文全国コンクール 課題図書」

<http://www.j-sla.or.jp/contest/youngr/56-books.html>

最終確認日：2018年5月8日

3) NHK 「ダーウィンが来た！」

「第394回「日本縦断2000キロ！旅するチョウを追え」」ほか参照

<http://cgi2.nhk.or.jp/darwin/articles/detail.cgi?p=p394>

最終確認日：2018年6月13日

4) のら書店 「NEWS 新着情報」

「松岡享子さん朗読会 ワンダ・ガアグの『グリムのむかしばなし』」2017. 6. 9

<http://www.norashoten.co.jp/news/post-256.html>

最終確認日：2018年4月13日